2022 経済・経営 人文・法学部

国語問題

解答はすべてマーク式で解答用紙に記入して下さい。
解答用紙のみ提出して下さい。

2022年2月9日(水)実施

マーク式解答用紙記入上の注意

〔1〕 解答用紙はすべて**HBの黒鉛筆**で記入して下さい。(万年筆・ボールペン・シャープペンシルなどは使用できません。)

〔2〕 解答用紙は折りまげたり，破ったり，汚したりしないで丁寧に取り扱って下さい。

〔3〕 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し，その他の部分には何も書いてはいけません。

〔4〕 氏名を記入して下さい。

〔5〕 受験番号を記入し，さらにその下のマーク欄にマークして下さい。

〔例〕 受験番号が0010123のときは

氏名
鈴木一郎

受験番号						
0	0	1	0	1	2	3
⓪	⓪	⓪	⓪	⓪	⓪	⓪
①	①	①	①	①	①	①
②	②	②	②	②	②	②
③	③	③	③	③	③	③
④	④	④	④	④	④	④
⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥	⑥
⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑨

(注) ⓪ と ① のマーク間違いに注意して下さい。

〔6〕 解答科目欄から**解答する科目**を1つ選び，科目の右の◯に**マーク**して下さい。**マークされていない場合，または複数の科目にマークされている場合は，0点**となります。

〔7〕 解答番号は 1 から 23 まであります。
マークの記入方法は，例えば， 10 と表示のある問に対して③と解答する場合は，次の〔例〕のように**解答番号 10 の解答欄**に③とマークして下さい。

〔例〕

解答番号	解答欄
10	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

〔8〕 一度記入したマークを訂正する場合，消しゴムで**完全に消してから**記入しなおして下さい。

〔9〕 解答がおわったら，解答用紙に付着している消しゴムの**消しくずを**きれいに**取り除いて**下さい。

一　次の文章を読み、設問に答えよ。（**解答番号は** 1 ～ 11 ）

法隆寺大工の口伝

法隆寺の大工には代々口伝が伝わっていますのや。私はおじいさんからこれを教わりました。そのいくつかを紹介しましょう。

この口伝は伽藍を造営する大工たちへの教えであると同時に戒めでもありますな。本来、大工のためのものですが、みなさんが聞いても役に立つことがあるかもしれませんな。ものを作る心構えだったり、ものの見方だったり、人とのつきあい方やったりしますからな。

「神仏をあがめずして社頭伽藍を口にすべからず」

これは神の道を知らんものは神社建築を口にするな、また仏の道を知らぬものは堂塔伽藍を口にするなということですな。

これは何も神道や仏教の専門家にならねば手を染めてはならんということではないんですな。自分が造ろうとしているもの、かかわっている仕事がどんなものか知らなならんという宮大工としての心構えですな。金のためだけに仕事をしてはならんということでしょう。法隆寺は聖徳太子が仏法者を育てるための場所として造られたんです。その仏法によって国を治めようとしたんですな。その聖徳太子の教えがどのようなものかぐらいは知らんと、法隆寺の修理にも解体にもかかわれませんな。私がこの仕事にかかわるとき、法隆寺の管長の佐伯定胤さんが言いましたもんな、法華経ぐらいは目を通しておけって。

この口伝に似たもので、こないなものもありますのや。

「家宅は住む人の心を離れて家宅なし」

家宅を造るならそこに住む人の心組みを受けて、その意を汲んで造作しなさいということですな。まあ、大工のわがままや、自分の儲けで造るなということです。寺は仏さんの住むところやから仏さんの心組みを忘れるなということでしょうな。

「伽藍の造営には四神相応の地を選べ」

四神というのは中国から伝わった四つの方位の神様ですな。伽藍を造営するなら方位に適した場所を選びなさいというていうんです。四つの神というのは、青竜、朱雀、白虎、玄武です。【　Ⅰ　】

青竜は「勾芒」ともいいまして、春、草木の芽がたつ時期もいいますが、方位でいうと東の神様です。朱雀は季節は夏、方位は南。「祝融」ともいいま

して、火の神様ですな。白虎は季節は秋で、方位は西です。玄武は季節は冬、方位は北です。

これを地形ではどないなものかといいますと、東の青竜には清流がなければならん。南の朱雀は伽藍より一段低く沼や沢でなければならない。西の白虎には白道が走っていなければならない。北の玄武には山丘が伽藍の背景になっていなければならない。伽藍を建てるならこんな土地を選び、南に面し北を背にするように造営しなさいというんですな。

この口伝を法隆寺に当てはめてみましょうか。法隆寺のあるところを斑鳩(いかるが)といいますが、ここの東方には富雄川があり、青竜にヒッテキ(ア)しています。南の朱雀は伽藍より一段低く大和川に向かって傾斜し、朱雀にヒッテキ(ア)しています。西にはそんな大きな道はありませんが、西大門の西側に大和川に達する道がありますし、北の玄武に当たるのは矢田山脈が伽藍の背後に迫っています。

こんなふうに法隆寺は四神相応の地に造られていますな。こうした地相のよさが千三百年前の創建当時の伽藍を残すことができた理由かもしれません。こないにいうと迷信のようですが、たいていの都や城はこうした地に建てられています。南側が低いということは見晴らしがよく、日当たりがいいということですな。北に山というのは北風を防ぎ、過ごしやすいというふうにスイソク(イ)できますが、東に川、西に道というのも何かそれなりに意味があったんでしょうな。今ではなぜそういうのかはわかりません。

【　Ⅱ　】これが薬師寺の場合には当てはまらないところがあるんです。東には秋篠川があり、南は一段低くなっています。西は平城京西の二坊が貫通して口伝と合っているんですが、北には玄武に相当する山がない。欠相しているんですな。このためではないかもしれませんが、法隆寺が創建当時の七伽藍全部を残しているのに、薬師寺で残っているのは東塔だけですわ。

科学的やないといわれるかもしれませんが、私は口伝を信じています。それが伝統だと思っています。こうして今まで引き継がれてきたんです。もし私が伽藍を建てろといわれましたら、迷わずに一番先にこの口伝に従った場所を捜しますし、そうでない場所には建てませんでしょうな。

(a)「堂塔建立の用材は木を買わず山を買え」

木の質は土の質によって決まりますし、木の癖は「木の心」といってもいいかもしれませんが、それは山の環境によって生まれますな。たとえば山の南斜面に生えた木を例に取ってみましょう。この木の日の当たらない北向きの側には枝が少ないんですな。あったとしても細くて小さいもんです。逆によく日の当たる南側には大きく太い枝が出ます。この地形が年間平均すると西からの風が強い場所だったとすると、この木の南の枝は風に押されますな。それで東に捻(ねじ)れます。しかし、この木が風によって無理に東に捻られているために何とかしてもとに戻ろうとする性質が生まれてくるんです。この元に戻ろうとする性質をこの木の癖といいますのや。すべての木には生える場所によってこうした癖ができますな。

口伝にいう「木を買わず山を買え」というのはこの木が伐採されて、製材されてから買うのではなく、自分で山に行って地質を見、環境による木の癖を見抜いて買いなさいということです。

［　イ　］といいましたら、製材されてしまってからでは木の癖は見わけづらいんですな。この西に戻ろうとする癖の木は、切り倒され、カンソウ(ウ)しますと木の本音を出すんです。この口伝は木の癖の見抜き方を教えているわけですな。

それとこの口伝のもう一つの意味は、一つの山で生えた木を持って一つの塔を造れ、ということです。あちこちの山の、性質の異なる木をばらばらに買わず、自分で山へ行き、木を見てその山の木をうまく使って一つの塔や堂を建てなさいというているんですな。

近ごろは実際に山へ行って木を見るということが難しくなってきています。それでも私は薬師寺の木を買いに台湾の山へ行きましたで。二千年を越す檜(ひのき)を見て心からよかったと思いましたな。山を見て、木を見ておいたので悔いのない仕事ができたと思っています。

この口伝は、次の四番目、五番目の口伝と密接な関係があります。

「木は生育の方位のままに使え」

この口伝には次のような文が続いていますのや。「東西南北はその方位のままに、峠および中腹の木は［　A　］材、谷の木は造作材に」

山ごと買った木をどう生かすかということです。その山の南に生えていた木は塔を建てるときに南側に使えというているんですな。同じように北の木は北に、西の木は西に、東の木は東に、育った木の方位のままに使えということですな。

このとおりに木を使うとどうなるかといいましたら、南に育った木には枝がありますから、たくさん節ができますわ。ですから南の柱に節が多いものが並ぶことになりますな。

法隆寺の飛鳥建築でも薬師寺の白鳳(ほう)建築でも、堂や塔の南正面にはこの口伝通りに節の多い木が使われていますわ。逆に北の柱にはほとんど節が見えませんな。薬師寺の東塔の南面の柱を見てみなはれ。「一間(いっけん)六節」という言葉どおり一間の間に六個も七個も節がありまっせ。法隆寺の中門でも同じですな。南には節がいっぱい見つかりますが、北には少なく、あっても小さなものですな。

こうした知恵が千三百年の命を持たせているんですな。私は昭和九(一九三四)年から二十年間にわたって法隆寺の解体修理をしました。創建以来初めての解体修理でした。そのとき室町時代に建てられた建造物も修理せなならんでしたよ。室町のものは六百年しかたってないんでっせ。それでも修理せなならんかったほど傷んでいたんですわ。

室町のものは節のない材を集めて丁寧に組んでありまっせ。それでも六百年しか持たなかったんです。口伝を忘れたからですな。節だらけの飛鳥の木

の半分以下の耐用年数ですがな。口伝にはそれだけの意味がありますのや。

山の中腹以上峠までの木は［　A　］材に使えというのは、ここらに育った木はたくさんの光を浴びてしっかり育っていますな。日当たりはいいんですが、風も当たる、嵐にもうたれる、雨にもたたかれる、中腹以上の木はこうした環境で育っているから木質が強く、癖もまた強いんですな。こうした癖があり、強い木は柱や桁、梁（はり）などの建物を支える骨組みになる部分に使いなさいと教えているんです。

谷は水分も多く養分も十分にありますわ。こうしたところでは光も嵐もそんなに強くなく、木は素直に育ちます。こうして素直に育った木は癖がない代わりに強さもそないにありませんから、長押（なげし）や天井、化粧板なぞの造作材に使えというんですな。

昔の人は山の木の性質をよく観察してまっせ。今の大工にこないなことを言ってもさっぱりわかりませんやろな。時代が進んだからといって知恵が必ずしも増すわけではないんだすな。下手したら昔の人のほうがずっと利口でっせ。

「堂塔の木組みは寸法で組まず木の癖で組め」

建物を組み上げるのに寸法は欠かせぬものやけど、それ以上に木の癖を組むことが大切やというているんですな。

木の癖というのは前に話しましたな。左に捻れを戻そうとする木と、右に捻れを戻そうとする木を組み合わせて部材同士の力で癖を封じて建物全体のゆがみを防ぐんですな。もしこのことを知らずに、右に捻れそうな木ばかりを並べて柱にしたら、建物全体が右に捻れてしまいますな。こんなことになってはいかんというんです。この木の癖を見抜くためにも山を買え、山へ行って目でたしかめよというているんです。

【　Ⅲ　】みごとなもんですな。この癖組みが完璧なことが、千三百年たっても建物をゆがまさずに、五重の軒先を一直線に持たせている理由ですわ。

近ごろの大工は寸法はやかましくいいますが、木の癖は問題にしていまへんな。寸法どおりに組み上げるのは誰でもできまっせ。そのときの寸法だけでは建物が長くは持たないことは長いこと大工をやっていたらわかるはずですが、いつまでもそのままですな。

建築というものは自然のなかで風雪に耐えねばなりませんのや。木の癖組みを忘れた建築は建築のうちに入りませんで。建物としての力が弱く、すぐに癖が出てゆがみを生じますわ。これではあきませんな。こんなことで造っても木の耐用年数の半分も持たされません。大工は木の性質、癖を生かして耐用年数一杯は持たせな自然の命の無駄使いですわ。まして癖があるからというて、その木をはじいて使わんというのは、もってのほかでんな。人間と同じです。癖は生かして使うてやるのが勤めですわ。

(b)「木の癖組みは工人たちの心組み」

建築は一人ではできませんのや。大勢の人間の力を結集して出来上がるもんなんですな。力を結集するというのは心を一つにするということですな。大勢の職人の心を棟梁(りょう)の心構えと同じように仕事に立ち向かう心構えにせななりません。職人も木と同じように癖がありますわ。それぞれ自分の腕を誇り、それで家族を養っているんですから一筋縄ではいきません。そんな人たちばっかりです。この人たちをまとめなならんのです。癖も違うし、腕も違う。うまい下手、早い遅い、さまざまですわ。それぞれ得手不得手もありまっしゃろ。建物が大きければ大きいだけ人がいりますわ。大工だけでなく、石工、左官、瓦屋、諸職の人がいてますな。この人たちを集めての仕事ですから、途中で投げ出すわけにはいかないんですな。気に入らんと思っても辞めるわけにはいきません。職人が気に入らんというてもそれを上手に使うのが棟梁の仕事です。この口伝はこれらの工人たちの癖を読んで、仕事がうまくいくようにせなならんという棟梁の心構えを説いたもんですな。【　Ⅳ　】

(c)「工人たちの心組みは匠(しょうちょう)長が工人らへの思いやり」

これは文のとおりですな。匠長というのは棟梁のことですな。大勢の工人の心を汲んで一つにするためには棟梁に思いやりがなければならんということですな。現場を見まわっていますと、上手もおれば下手もおります。上手達人はさておいて、この下手を建物が完成する三年なり四年なりのあいだに立派な大工に導いてやりましょうという思いやりが必要だといっているんです。この口伝にはその思いやりをこんなふうにいってますのや。

「仏の慈悲心なり、母がわが子を思う心なり」

工人たちへの思いやりは母親が子供を思うのと同じようにせなあかん。何かをしてやるからというてダイショウ(エ)を求めるような浅ましい心ではいかんというんですな。しかし、棟梁ですから、たんに工人を甘やかせばいいというもんやないんです。甘やかすのと思いやりとは、まったく別のものでっせ。これをごちゃごちゃにしたら、まとまるものもまとまりませんし、育て方を間違いまっせ。むしろ甘やかすのは思いやりがないのに近いかもしれません。このごろの親を見ていましたら、この二つを取り違えている人が多いですな。

「百工あれば百念あり、これをひとつに統ぶる。これ匠長の器量なり。百論ひとつに止まる、これ正なり」

百人の工人があればそれぞれ考えが違う。百人いたら百人別々の考えがあると思えというんですな。今どき学校でも会社でも、人の上に立つ人たちはこんなふうに生徒や社員を見ていますかな。この百人の心を一つにまとめるのが棟梁の器量というもんや。みんなの心がまとまって、初めてその方向が正しいというんですから、ずいぶん進んだ考えですな。昔の人やから、古くて、何でも上に立つ人は号令ひとつで下の者の意見や考えなんか無視してい

たんやないかと思っている人が多いやろけど、この口伝がまったくそうやないことを物語っていますな。

大きな仕事は人の考えを無視して、支配する力だけではできないんですな。もしそうやったとしても心のこもった仕事はできません。心のこもった仕事をせな、建物は美しゅうないし、長く持たせられませんな。それでは木の命を生かすことはできません。

これでは棟梁というのはやたら難しい仕事やし、そんなことできたんかいと思う人がおりますやろけど、千三百年前にこうしてたくさんの工人を使って法隆寺や薬師寺を造って、今まで残してくれているんやから、できるんですな。法隆寺を見ていたら本当に飛鳥の工人の偉大さに頭が下がります。

口伝というたら堅苦しいものやと思いまっしゃろけどな、この口伝には［　B　］も入っていますのや。

「ひとつに止まるこれ正なり」

この文です。一つにまとまったものが正しいことだ、という意味ですが、一つは「一」ですな。これを止めるという字の上に乗せましたら「正」ですわ。うまいこと言うてまっしゃろ。

「百論をひとつに止めるの器量なき者は謹み惧(おそ)れて匠長の座を去れ」

厳しいですな。工人の意見を一つにまとめられんかったら棟梁を辞めよというんですからな。そんなとき、上に立つ者は自分の不徳を恥じず、下の者が悪いというて首にしたり、よそに行かしたりしていませんか。下の者の意見をまとめられんのは自分に器量がないからだというんですな。こんなことになったら自分から辞めなければならん。建物を完全に建てるということは大変なことなんです。木の癖が読める、腕がいい、計算ができる、これだけではだめなんですな。棟梁というからには工人に思いやりを持って接し、かつ心をまとめなければならんのです。

諸職工の心構えが完成してこそ建物の完工という結果がいただけるんです。その心組みがなければ堂塔の造営はならんのです。完成されるすべての責任は棟梁にあるんです。そのぶんだけ棟梁の責任は重いということですな。私は自分がずっと棟梁でいるあいだ、この口伝を心に言い聞かせていました。【　V　】

(d)「諸諸(もろもろ)の技法は一日にして成らず、祖神たちの神徳の恵みなり、祖神忘るべからず」

そのとおりですな。口伝を守ってそれを実践すれば堂塔はできるけれども、これは自分だけの功やないというんですな。先人たちが実験を重ね、失敗を正し、こうして伝えてきた技法によるんや。自分の知恵や力だけではできるもんではない。神に感謝し、以後も口伝、技法を伝えなならんぞというているんですな。

本当にそうだと思いまっせ。私はおじいさんによって棟梁に育てられました。教えられた技法はおじいさんが考えたものやなしに、その前から伝わったものです。千年以上の時間をかけて間違いを正し、積み重ねてきたすばらしいものです。その技法に間違いがなかったことは法隆寺が証明してくれていますがな。私は長く大工をやってきましたけど、自分が新しく考え出したものは何にもありませんでした。それより解体修理をしながら、どうやってこんなことができたんやろと考えさせられることばかりでしたな。今でも飛鳥の工人に追いつかないと思っとるんです。

すべてこの口伝のとおりですな。科学が進歩したというて、昔の技術を無視したり、忘れてしまってはいけませんで。経験の積み重ねにはそれだけの価値が隠されておりますのや。科学はややもすると、経験や勘を枠の外にはずそうとする傾向がありますが、経験や勘も立派な学問なんでっせ。数字や文字にできんからというて無視したら、大きな損失ですな。

頭の記憶だけやなしに手による記憶というものもありますのや。法隆寺や薬師寺の塔はその記憶の結晶やおまへんか。これらのみごとな建造物を今のような道具なしに、一つずつ違う木の癖を生かして組み上げたんでっせ。もう少し人間は謙虚になって自然や先人の残したものを見な、いけませんわな。あまりに自分のことだけ、目先のことだけを考えすぎますわ。先人はここに千年以上の時間を越えてものを見る習慣を持っていたことを証明して見せてくれているんですからな。

このほかにも口伝は百条ほどもありますが、それは細かなことです。この口伝が少しでも皆さんのお役に立てればと思って説明しましたのや。

（西岡常一『木のいのち木のこころ（天）』による。ただし、本文の一部を改変した。）

(注) 伽藍 ═ 当初は、僧侶たちが住んで仏道を修行する清浄閑静な所を意味していたが、後に寺院の建築物の名称となったもの。
白道 ═ 大きな道。
一間 ═ 尺貫法における長さの単位。約一・八二メートルを表わす。

設問

(1) 傍線部分(ア)〜(エ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①〜④の中からそれぞれ一つ選べ。解答番号は 1 〜 4 。

(ア) ヒッテキ 1

① 生活ヒツジュ品を購入する
② 有効成分がブンピツする
③ ケイテキを鳴らす
④ コウテキシュに巡り合う

(イ) スイソク 2

① 図面にスイセンを引く
② スイセン状を持参する
③ 偉大なソクセキを残す
④ ソクセキ料理を食べる

(ウ) カンソウ 3

① カンブ候補となる
② 内政カンショウだと抗議する
③ ショウソウ感に駆られる
④ ソウドウが頻発する

(エ) ダイショウ 4

① エンダイな野心を抱く
② 小説のダイザイを選ぶ
③ ムショウでサービスを提供する
④ ショウケイを抱く

(2) 空所 イ に入る最も適当なものを、次の中から一つ選べ。解答番号は 5 。

① まさか
② もっとも
③ なぜか
④ たとえば
⑤ かりにも

(3) 二つの空所 A に共通して入る語句として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。解答番号は 6 。

① 断熱
② 屋根
③ 壁面
④ 内装
⑤ 構造

(4) 空所 B に入る語句として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。解答番号は 7 。

① 皮肉
② 洒落(しゃれ)
③ 矜持(きょう)
④ 美学
⑤ 野暮

(5) 本文中からは左の一文が抜かれている。この一文を挿入するのに最も適当な箇所を、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 8 。

法隆寺の五重塔や金堂を解体してみまして、この口伝が完璧に守られているのを感じました。

① 【 Ⅰ 】　② 【 Ⅱ 】　③ 【 Ⅲ 】　④ 【 Ⅳ 】　⑤ 【 Ⅴ 】

(6) 傍線部分(a)の口伝が「木を買わず山を買え」と説いている理由として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。解答番号は 9 。

① 土の質によって決まる木の質を見抜くことができ、山の南斜面に生えた大きく太い木を選びやすいから。
② 山の環境によっては、日の当たらない北向きの枝が少なく、細くて小さい木を求めやすいから。
③ 木が伐採され、製材されてからでは高価になるので、自分で山に行って買うほうが経済的だから。
④ 木の癖を見抜いて買うことができ、適材適所を実現することができるから。
⑤ 山を見て木を見ないと、大工として悔いが残るから。

(7) 傍線部分(b)と(c)の口伝について、本文の内容と一致するものを、次の中から一つ選べ。解答番号は 10 。

① 家に住む人の心のあり方に沿って、家は建てねばならないので、建築主と棟梁および工人たちは心を一つにせねばならない。
② 家を建てるのであれば、木の癖を矯正しながら、全体の形を一つにそろえるべきである。
③ 職人の力を結集して完成させる建築では、木の癖を読み、住む人の心構えを踏まえ、職人の癖を生かすのが棟梁の仕事である。
④ 建物が完成する三年なり四年なりのあいだに、仏や神の教えをよく学んでいけば、下手な工人も立派な大工になる。
⑤ 建物を組み上げるのには、個性豊かな工人たちを一つにまとめる心づかいが必要である。

(8) 傍線部分(d)の口伝の内容と**一致しないもの**を次の中から一つ選べ。解答番号は 11 。

① 先人たちが培ってきた技法こそが堂塔造営の英知なので、自らの技法を誇ることなく、おじいさんたちの教えを重視しなければならない。

② 科学が進歩したといっても、昔の技術や経験の積み重ねを無視することはできず、先人の遺(のこ)したものを見なければならない。

③ 千年以上の時間をかけて積み重ねられてきた口伝や技法は、神に感謝しながら伝えていかなければならない。

④ 経験や勘は、数字や文字にならないからといって軽視すべきではなく、科学以上に重要視しなければならない。

⑤ 頭の記憶だけでなく手による記憶も大事で、法隆寺や薬師寺の例からも明らかなように、頭の記憶に頼り過ぎてはならない。

二　次の文章を読み、設問に答えよ。（**解答番号は** 12 ～ 23 ）

「忘れる」の二つの意味

どれほど記憶力に自信がある人であっても、「忘れる」ことから逃れることはできません。たとえば、誰でも、昨日の朝食のようすは思い出せるはずです。しかし、一〇年前の今日の朝食のようすを思い出すことはできないのがふつうでしょう。それはなぜでしょうか。

古代ギリシアの哲学者プラトンは、記憶を柔らかい蠟板にたとえています。五官を通して取り入れられた感覚や、自分の思考が記憶されるのは、あたかも指輪の印章を蠟板に押し付けた痕跡に似ているというのです。この痕跡が蠟板に残っているかぎり、記憶は保存されますが、時間の経過とともに、弾力性をもった蠟がその反発力で痕跡を消し去ってしまうように忘却が起こるといっています。

さらにまた、プラトンは、記憶力の個人差を説明するために、人によって、この蠟板の大きさや柔らかさが異なると主張しています。つまり、蠟板が小さければ刻印できる痕跡の数は少なくなり重なり合って区別できなくなりますし、蠟板が硬すぎたり柔らかすぎたりすると、痕跡が不鮮明となり長続きせずに忘却が起こってしまうというわけです。

確かに、このプラトンの蠟板モデルは、冒頭にあげた朝食の記憶の例をうまく説明することができます。しかし、このモデルには難点もあります。それは、蠟板モデルにしたがうと、一度忘れてしまったことがら（蠟の痕跡が消えたことがら）は、二度と思い出されることがないという点です。果たしてそうでしょうか。

プラトンは、もう一つの記憶のモデルも提案しています。それは、（動物園にあるような）大きな鳥小屋を仮定し、その中にはあらゆる種類の鳥が入っているというものです。このモデルで重要な点は、手で捕まえている鳥は「所持している」と呼び、その時点で鳥小屋にいるほかの多くの鳥は「所有している」と呼んで、記憶の状態を区別していることです。つまり、「所持している」のは今意識的に思い出せる記憶であるのに対して、「所有している」のは思い出せない（忘れている）ものの、けっして消滅していない記憶だというのです。

このように、「忘れる」と一言で言っても、そこには二つの意味があります。その一つは、長い年月がたってしまうことで、記憶が消滅してしまうケースです。プラトンの蠟板モデルで説明されます。もう一つは、どこかに記憶としては残っているけれど、それをうまく引き出せないケースです。プラトンの鳥小屋モデルで説明できるものです。

実はこのことは日本語の「忘却」ということばをよく見ればわかることです。「忘却」の「忘」という字は「心を亡ぼす」とか「心が亡びる」と読めます。つまり、完全に消滅してしまうことを表しています。一方、「忘却」の「却」という字は「去る」という意味があり、「退却」や「却下」のように、「後ろへ下がる」と

か「しりぞける」ということを表していて、消滅という意味ではないのです。

A

哲学者であったプラトンの記憶のモデルは、彼が自分自身やまわりの人間を観察することから考え出されたものです。このモデルによる忘却の説明は、私たちの日常生活での経験とも合致していて、納得できるものです。そのため、プラトン以降、さまざまな哲学者たちが考え出した記憶のモデルにも、大きな影響を与えました。

これら哲学で検討された記憶の問題というのは、私たちの記憶がどのように形成されるか(プラトンの言う蠟板にどのように刻印されるか)ということでした。たとえば、一六世紀から一九世紀に至るイギリスの連合主義と呼ばれる哲学者たち(ジョン・ロック、ジョン・スチュアート・ミルなど)は、心を細かく要素に分け、それらの間の結合、すなわち連合が強められることで、記憶が形成されると考えたのです。そして、連合を強めて記憶の形成に影響を与えるものとして、それを体験したときの鮮明さ、反復回数、体験(学習)に要した時間などが考えられていました。言い換えますと、体験が鮮明でなく、反復回数が少なく、学習にかけた時間が短ければ、すぐに忘れられてしまうというのです。

やがて一九世紀の後半に、心理学という学問が哲学から独立しました。当時、(ア)ボッコウしつつあった科学(物理学、化学、天文学、医学など)の流れの中で、実験とそれによる測定(数量化)を重視した学問が、心理学だったのです。

この心理学者の中で最初に記憶の実験を行ったのが、ヘルマン・エビングハウスというドイツの学者でした。彼は自分自身を実験台として、時間の経過につれて記憶がどのように忘却されていくかを数多くの実験によって解明したのです。

まず、「エビングハウスの忘却曲線」と名づけられた図を見てください。この図の縦軸には記憶として残されている分量が、横軸には覚えてからの経過時間(直後から六日間)が、それぞれ示されています。エビングハウスの行った実験の詳細を説明するまでもなく、この図を見ると、私たちの記憶というものが覚えてから時間がたつにつれて、最初のうちは急速に、その後、ゆっくりと忘れられていくようすがよくわかると思います。このように、直線的には記憶が忘却されないことから、忘却直線ではなく忘却曲線と呼ばれています。

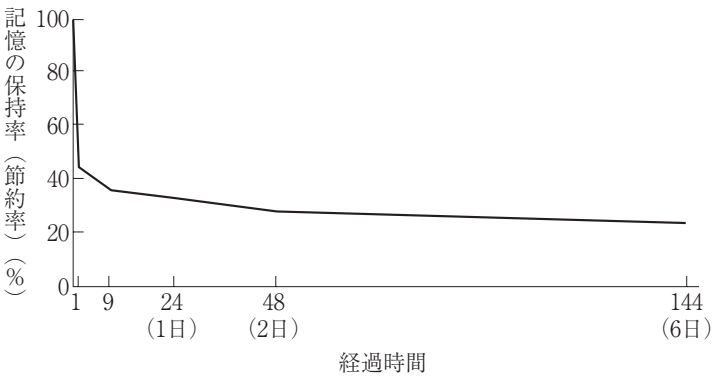

図　エビングハウスの忘却曲線

では、(a)エビングハウスの行った記憶の実験について説明しましょう。彼はイギリスの連合主義の伝統を引き継いでいましたが、何よりも、時間の経過にともなって、「純粋な記憶」がどのように忘却されていくのかを数量的に解明したいと考えました。

私たちは、これまでに、実にいろいろなことを体験し、それらのいくつかが記憶として残っています。しかし、これらの記憶は、体験された時期や状況も違いますし、ましてや、体験の中身もそれぞれ異なっています。そのため、このような雑多な記憶の忘却を調べたとしても、記憶の一般的な法則を解明することはできません。

そこで、エビングハウスは、覚える時期や状況を同じにした上で、可能な限り、同一の体験の記憶を扱うことにしたのです。すなわち、自分がすでに記憶している過去の体験とはまったく無関係な(何の連合もない)材料を作り、それらを覚えることにしたのです。具体的には、たとえば「WUX」のように、子音と母音を組み合わせて、意味をもたない無意味綴りと呼ばれる材料を二三〇〇個も準備しました。これらの無意味綴りは、実験で初めて目にするのですから、当然、プラトンの言う蠟板には何も刻印されていないことになります。

次に、一個だけではあまりにも簡単に覚えられますので、無意味綴りを一〇個以上集めたリストと呼ばれる材料を自分でいくつも覚えたのです。具体的には、それらのリストを完全に暗唱できるようになるまで、一定のペースで読み上げることを何回も繰り返して、暗唱にかかった反復回数を記録しました。このように、材料を覚える段階は、学習ないしは記銘と呼ばれます。エビングハウスは、どの材料であっても、完全に暗唱できた時点で繰り返すことをやめていますので、ちょうど蠟板に同じ深さの痕跡を刻んだことになります。

そして、さまざまな時間の経過後に、どれだけ保持され覚えられているか(どれだけ忘却されたか)を自分でテストしました。このテスト段階は、再現ないしは想起と呼ばれます。実は、このテストにも、エビングハウスは工夫を凝らしています。ふつう、私たちが学校で受けるテストは、ゼロから思い出さなければならない記述式や、正解を含んだいくつかの選択肢の中から覚えたものを選ぶといった選択式などが使われます。

これに対して、エビングハウスは、最初に学習したのと同じ無意味綴りを使って、再び完全に暗唱できるまでの回数を調べたのです。このテスト方法は、「再び学習する」という意味で再学習と呼ばれます。そして、最初の学習段階と再学習段階のそれぞれで完全に覚えられるまでにかかった反復回数の比率(節約率)を算出しました。たとえば、学習段階で暗唱までに一〇回かかり、再学習段階では、それが七回で済んだとすれば、三回分、学習が節約されたことになります。つまり、三〇％の節約率があった(もとの記憶の三〇％が残っていた)と言えます。

エビングハウスが、自分の実験結果をまとめて『記憶について』という本を出版したのは一八八五年のことです。その後の記憶の心理学では、多くの参加者を対象に、学習(記銘)と再現(想起)のそれぞれの段階の条件を細かく設定した実験が行われるようになりました。しかし、いずれの研究でも、エビングハウスの行ったように、学習と再現を分けて、記憶の測定(数量化)を行っているという点では、本質的に何も変わりません。その意味で、エビング

ハウスこそ、記憶の科学的研究の先駆者と言えるのです。

B

ここまで、「記憶」や「忘却」について厳密に定義せずに話を進めてきました。実は、記憶の心理学者たちは、記憶をいくつかの種類に分けて考えています。たとえば、エビングハウスは、記憶をその現れ方によって三つに区別しています。

第一の記憶は、私たちが「記憶」と聞いて、真っ先に思い浮かべるものです。すなわち、「我々がその目的で意志を働かせれば、失われたかと思われた意識の状態を、ふたたび意識のなかに呼びもどすことができるもの」です。一方、どれだけ一生懸命に努力しても、もとの状態を少しも再現できないときには、私たちは「忘れた」と判断するのです。ただし、ここで重要な点があります。それは、もとの状態を再現できずに「忘れた」と判断できるというのは、何らかの記憶が「存在していた」という感覚が残っているということです。

エビングハウスのあげている第二の記憶は、「かつて一度意識のなかに存在した精神状態が、なん年もたったあとで、全く意志の働きなしに、明らかに自発的に、ふたたび現れてくる」というタイプの記憶です。つまり、第一の記憶に見られるような「何かを思い出そう」という意識的な努力とは無関係に、自然に再現される記憶です。この種の記憶は、思い出そうという意図が必要ないことから、無意図的記憶と呼ばれ、ここ数年、多くの研究が行われるようになってきています。

これら第一と第二の記憶は、その現れ方が意図的にしろ無意図的にしろ、もとの状態が再現された時点で、「それが確かに自分の過去にあった出来事で、自分が今それを思い出しているのだ」と意識できる点が特徴です。そこで、この第一と第二の記憶は、現在では、意識的記憶ないしは顕在記憶と呼ばれています。ふつう記憶と言えば、誰もが、この意識的記憶を思い浮かべるはずです。

これに対して、エビングハウスのいう第三の記憶は、現在では、無意識的記憶ないしは潜在記憶と呼ばれ、それが再現されても「過去のことを思い出しているのだ」という意識がともなわれない記憶です。その代表的なものは、音楽やスポーツ、料理や作法など、さらにはまた外国語の使用など、いわゆる技能の習熟にかかわる記憶です。どのようなものであれ、習い始めの段階では、「これをこうしてこうやって……」などと、いちいち意識的に思い出す必要があります。けれども、何度も反復練習することで、やがて思い出しているという意識がなくとも、その活動をスムーズにこなすことができるようになります。これこそが無意識的記憶のおかげなのです。イ、これらの技能の記憶というのは、いったん獲得しますと、きわめて長い年月にわたって忘れません。

実はエビングハウスの使った再学習というテストは、意識的記憶だけを調べているものではありません。無意味綴りを何度も読んで覚えたのとまった

く同じように読むというテストは、流ちょうに読む技能の習熟という無意識的記憶の側面も調べているのです。実際、エビングハウスの忘却曲線の形状を見たジェームズは、この曲線をどれほど長く延長したとしてもゼロになることはないとさえ指摘しています。

英語も読めたエビングハウスは、イギリスの詩人ジョージ・ゴードン・バイロンの『ドン・ジュアン(ドン・ファン)』という詩を英文のまま覚えています。その結果、無意味綴りの場合よりは忘却が遅かったものの、ほぼ同様の忘却曲線が得られました(二四時間後の節約率は五〇%であり、無意味綴りの三四%よりも多く残っていました)。

その後、エビングハウスはバイロンの詩を一度も見ずに、二二年後、もう一度再学習してみたのです。すると、意識的にはまったく思い出せなかった(すっかり忘れていた)にもかかわらず、何と七%の節約率が認められたのです。つまり、本人には過去の記憶が残っているという意識がないにもかかわらず、わずかとはいえ無意識的記憶が残っていたわけです。

健忘症のヘンリーの記憶

ドイツでエビングハウスが記憶の実験的研究を行っていた頃、フランスではテオドール・リボーという心理学者が健忘症の患者たちについて調べていました。健忘症とは、単なるもの忘れではなく、記憶が跡形もなく消滅してしまうという病気です。

リボーは、さまざまなタイプの健忘症の患者たちに接するうちに、健忘症に共通するある特徴に気づきました。それは、健忘症で失われる記憶は、思い出のような個人的な出来事に関する記憶であって、「習慣、手職、裁縫、刺繍(しゅう)の技量、自国語、他国語の会話の能力、読書、筆記の能力が失われることはない」ということです。つまり、健忘症の患者の失う記憶は意識的記憶であって、無意識的記憶は残されているようなのです。

エビングハウスと異なり、リボーは実験を行っていませんが、その後、一人の健忘症の患者を対象に、何十年にもわたって実験が行われることになりました。対象となったのは、そのイニシャルをとってHMとして知られている健忘症の患者です(HMは二〇〇八年一二月にエイミン(イ)し、同時に彼の本名であるヘンリー・グスタフ・モライゾンも公開されました)。

ヘンリーは二七歳のときに、重いてんかん発作の治療のために、脳の海馬と呼ばれる部分を手術によって切り取ったのです。手術は大成功したかのように思われました。事実、手術以降、てんかん発作が起こることはなくなりましたが、彼は新しい出来事を覚えることが一切できなくなってしまいました。彼の記憶は、ほんの数分で消え去るために、毎日会っている医者を見ても誰であるかを覚えることができません。

一方、手術前の記憶はよく残っていました。たとえば、過去に活躍した大統領や映画俳優などの有名人の顔写真を彼に見せてみました。すると、手術前の有名人の顔写真に関しては、それが誰だかすぐにわかりました。ところが、手術以降の有名人の顔写真は、何度も新聞やテレビで見ているにもかか

わらず、「まったく記憶にない」と言って、誰なのかわからないのです。

このように、健忘症であるヘンリーが新しく意識的記憶を作り上げる能力はゼロになっていました。しかし、無意識的記憶を作り上げる能力は残っていました。

心理学を学ぶ学生の多くが体験する鏡映描写と呼ばれるテスト課題があります。このテスト課題は、テスト用紙に印刷された大きな星印の輪郭をできるだけ早く鉛筆でなぞることです。ただし、星印と自分の手もとは直接見えないようにされ、鏡に映った星印と自分の手の動きを見ながら、輪郭をなぞらなければなりません。鏡に映った像は左右が反転していますので、慣れないうちは、スムーズに輪郭をなぞれずに、何度も輪郭をはみ出してしまいます。ところが、何度も練習しているうちに、次第に輪郭をはみ出すというエラーが減少していきます。

この鏡映描写を三日間にわたって、毎日一〇回ずつヘンリーにやってもらったのです。すると、一日目でも一〇回やるうちに、次第に輪郭をはみ出すというエラーが少なくなり、三日目になるとほとんどエラーすることなくスムーズにできるようになったのです。ここで重要なことは、ヘンリーの記憶は数分間しか続かないので、二日目や三日目に鏡映描写を行っても、そのことを以前にやったという意識的記憶はありません。［ロ］、無意識の記憶が蓄積されているので、確実に上達していくのです。

このように、ヘンリーの長年にわたる献身的な協力のおかげで、意識的記憶と無意識的記憶の研究は大きく進歩しました。残念なことに、意識的記憶をもてなくなったヘンリー自身は、五〇年もの間、自分が何をやって、それがどれだけ役に立ったのかということを知らずに亡くなりました。この事実はとても悲しいことです。しかし、ヘンリーが意識的記憶をもっていなかったからこそ、何十年もの間、飽きずに記憶の研究に協力できたのであって、それが苦痛でなかったことがせめてもの救いと言えるかもしれません。

自己という一人の人間にある無数の心理

エビングハウスの研究した記憶は、いわゆる学校での暗記のような記憶活動であって、初恋や失恋の思い出のような、私たちのふだん思い浮かべる記憶とは違うと感じたかもしれません。その一番大きな理由は、エビングハウスが研究した記憶が、いわば知識のような記憶であって、自分の身の上に起こった出来事の記憶ではないからです。

エビングハウスと同時代のイギリスに、フランシス・ゴールトンという一風変わった学者がいました。ゴールトンは、進化論で有名なチャールズ・ダーウィンのいとこで、若いときに父親の莫大（ばく）な遺産を相続しました。それ以降、ゴールトンは、アフリカ探検をはじめとして世界中を旅行しながら、気象学や心理学、統計学に興味をもち、犯罪捜査に[ウ]シモンやモンタージュ写真を取り入れることを提案するなど、自らの関心のおもむくままに活躍して

いました。

そんな多才なゴールトンが行った研究の一つに、自分の思い出について調べた研究があります。まず、彼が注目したのは、ある特定のことばを見聞きすると、昔の自分の思い出がよみがえってくるという事実でした。これは、そのことばと過去の記憶が連合しているからに違いないとゴールトンは考えました。そこで、五〇代のゴールトンは、「馬車」などの七五個のことばをもとに、それぞれのことばから自分の頭の中に思い浮かぶものを調べてみたのです。

そうやって思い浮かんだものの中には、確かに思い出も多くありましたが、昔覚えた詩や、(エ)バクゼンとした風景といったものも含まれていました。思い出された出来事の時期を、大ざっぱに、幼少年期、青年期、最近というように三つの時期に分けて調べてみると、青年期(四六％)の記憶がもっとも多く、幼少年期(三九％)がそれにつぎ、もっとも少なかったのは最近(一五％)の出来事でした。この結果は、エビングハウスが明らかにした「時間の経過とともに記憶が薄れていく」という法則と一致していない点が重要です。

ゴールトンの実験からほぼ一〇〇年後、やはり自分を実験台に、思い出について調べたマリーゴールド・リントンという女性の記憶研究者が現れました。みなさんの中にも日記を付けている方がおられるかもしれませんが、リントンも毎日の出来事の中から二つ以上の出来事を選び出し、六年間にわたって、それがどういうものであったかを日付とともにカードに記録していったのです。こうして六年の間に、記録されたカードは五五〇〇枚を超えました。そこで彼女は、一カ月ごとに、溜(た)まっていく記録カードをでたらめに抜き出し、そこに書かれている出来事を覚えているかどうかについて調べてみました。

その結果、研究を始めた一年目には、わずか一％が忘れられただけで、残りの九九％の出来事は覚えられていました。二年目以降になると、記録カードを見ても、それが自分の身に起こった出来事だと思い出せない枚数が、一年間あたり五％ずつ増えていきました。つまり、六年前の出来事になると、おおむね七四％しか覚えていないということになります。

このように、最初の一年間は、ほとんど忘却が起こらず、それ以降は、きわめてわずかずつ忘却されるというのが思い出の忘却曲線の特徴なのです。これは、無意味綴りを使ってエビングハウスが見出した忘却曲線の特徴(最初の一日で急激に忘却が起こる)とは、まったく異なっています。

このような思い出の忘却のしかたや、(中略)さまざまな特徴から、自分の思い出に関する記憶は、現在では自伝的記憶と呼ばれています。「自伝的」ということばには、もし自分が自伝を書くとしたら、そこに必ず含めるような過去の出来事といった意味合いが込められています。そして、一九八〇年頃を境に、自伝的記憶に関する実に多くの研究が行われるようになりました。

このように自伝的記憶の研究が盛んになった理由は、あまりに行きすぎた心理学の［　C　］に対する反動があります。かつて日本の発達心理学に

大きな功績を残した岡本夏木の指摘を待つまでもなく、現在の心理学は、記憶、知覚、思考、言語、感情、リンショウ(オ)、性格、社会性などの無数の細かい専門領域ごとに研究が行われ、一個の人間としての全体像は見えにくくなっています。これに対して、自伝的記憶の研究は、常に自己という一個の人間の関わりから記憶を考えるので、これらの［　C　］された領域を束ねることが期待されているのです。

一個の人間という意味は、（中略）私たちが未来へ向かって生き続けていく存在であり、変化し続ける存在だということです。発達心理学者であった岡本夏木は、常に変化し続ける子どもの発達を目の前にしていたので、このような一個の人間の全体像の解明の必要性を痛感していたのでしょう。

（高橋雅延『記憶力の正体――人はなぜ忘れるのか？』による。ただし、本文の一部を改変した。）

(注) ジェームズ ═ ウィリアム・ジェームズ。一九世紀から二〇世紀のアメリカで活躍した心理学者。

設問

(1) 傍線部分(ア)〜(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①〜④の中からそれぞれ一つ選べ。解答番号は 12 〜 16 。

(ア) ボッコウ 12

① 作業にボットウする
② 紛争がボッパツする
③ 運転免許をコウシンする
④ シュコウを凝らした作品

(イ) エイミン 13

① シュンミン暁を覚えず
② ミンシンが離れる
③ エイダンを下す
④ エイセイ管理を徹底する

(ウ) シモン 14

① ショウ末節にとらわれる
② 論文のヨウシを書く
③ チョウモン会を開く
④ 水面にハモンが広がる

(エ) バクゼン 15

① トバクを禁止する
② 秘密をバクロする
③ ジゼン事業を行う
④ シュクゼンとして襟を正す

(オ) リンショウ 16

① 大学同士がリンセツしている
② 建物がリンリツする
③ ソショウに発展する
④ 犯罪のオンショウとなる環境

(2) 空所 イ に入る最も適当なものを、次の中から一つ選べ。解答番号は 17 。

① あるいは　② しかも　③ すなわち　④ ところが　⑤ なぜなら　⑥ にもかかわらず

(3) 空所 ロ に入る最も適当なものを、次の中から一つ選べ。解答番号は 18 。

① あるいは　② かえって　③ つまり　④ なぜなら　⑤ にもかかわらず　⑥ または

(4) 空所 A には、後に続く節をまとめる**小見出し**が入る。最も適当なものを、次の中から一つ選べ。解答番号は 19 。

① 完璧な記憶力は不幸？　② 記憶に関する初めての実験　③ 効率的な暗記をするためには
④ 心の要素と結合の仕組み　⑤ プラトンの失敗

(5) 空所 B には、後に続く節をまとめる**小見出し**が入る。最も適当なものを、次の中から一つ選べ。解答番号は 20 。

① 意識にはなくても記憶はある　② 「思い出す」ことの重要性　③ 時間経過と忘却の関係
④ 哲学から心理学への展開　⑤ 忘却曲線に隠された矛盾とは

(6) 空所 C に入る最も適当なものを、次の中から一つ選べ。解答番号は 21 。

① 安定化　② 大衆化　③ 可視化　④ 細分化　⑤ 抽象化　⑥ 透明化

(7) 傍線部分(a)の「エビングハウスの行った記憶の実験」に関する記述として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。解答番号は 22 。

① イギリスの連合主義と呼ばれる哲学者たちは、心を細かく要素に分け、それらの連合が強められることで、記憶が形成されると考えた。この伝統を引き継いだエビングハウスは、体験の鮮明さは記憶の形成に大きな影響を与えることを、実験によってはじめて明らかにした。

② エビングハウスの行った記憶の実験によれば、再学習の段階で、学習段階よりも無意味綴りを完全に覚えるまでに必要とした読み上げ回数が少なければ少ないほど、記憶の節約率は低いということになる。

③ エビングハウスの記憶に関する実験では、無意味綴りを完全に暗唱できた時点で、一定のペースでの読み上げの繰り返しをやめるという学習方法の工夫がなされている。これは、プラトンの記憶に関する蠟板モデルにおける、何も蠟板に刻印されていない状態を作り出すための工夫である。

④ エビングハウスは、記憶に関する数量的な検討を行うために、その実験方法にいくつかの工夫を凝らしている。その一つとして、自身のすでに記憶している過去の体験と無関係な材料を最初の学習段階において用いるという工夫を挙げることができる。

⑤ エビングハウスは、正解を含んだいくつかの選択肢の中から覚えたものを選ぶという選択式のテスト方法に工夫を凝らした上で実験を行っている。このことから、エビングハウスの行った実験が対象とした記憶は、学校での暗記のような記憶活動であったと言うことができる。

(8) 左のa～eは本文について述べられた記述である。本文の内容と**一致するものをすべて含み、かつ一致しないものを含まない**選択肢を、次の①～⑩の中から一つ選べ。解答番号は 23 。

a　エビングハウスによる記憶の分類によれば、意識的記憶と無意識的記憶の違いは、過去にあった出来事を思い出しているという意識がともなうか否かであって、意識的な努力によって記憶が再現されるか否かではない。

b　鏡に映ったテスト用紙に印刷された星印と自分の手の動きを見ながら、星印の輪郭をなぞるという鏡映描写と呼ばれるテストを用いたリボーによる実験は、意識的記憶と無意識的記憶の研究を大きく発展させることになった。

c　かつては哲学者によって検討されてきた記憶の研究と、実験とそれによる測定を重視する心理学者による研究は、研究の対象を自分自身とするか、それともまわりの人間とするかという点で異なっている。

d　ことばと過去の記憶の連合に関するゴールトンの研究結果は、エビングハウスの導き出した「時間の経過とともに記憶が薄れていく」という法則と一致しなかったことから、エビングハウスの行った実験では無意識的記憶の側面が調べられていないことが明らかとなった。

e　プラトンの提案する記憶に関する蠟板モデルと鳥小屋モデルの違いは、いわば知識のような記憶と自分の身の上に起こった出来事に関する記憶の違いを表している。

① aのみ　② bのみ　③ cのみ　④ dのみ　⑤ eのみ
⑥ aとb　⑦ aとd　⑧ bとd　⑨ cとe　⑩ aとbとd